

第 18 回 2008 年 6 月・ハイデルベルグ(前編)

1. ハイデルベルグへ

2007 年 7 月ハイデルベルグ大学へ研究員として旅立った次男を仙台空港で見送って以来、一度は訪れようと思っていた彼の地への旅行が約 1 年後に実現した。彼らは夫婦とも、言葉や生活習慣の違いにも短期間ですっかり順応して、このごろではそれほど苦労はしていない様子はメールや電話でわかっていたので、彼らの外国生活の様子を見回るための旅行というよりも、自分達の気楽な観光旅行だったのである。筆者の連れ合いには、海外旅行の前にはいつものことだが、ガイドブックのほかに何冊かの関係書物をこまめに読むという習性があり、この度の旅行では可成り前から準備が整っていたようである。出発直前に土産として仙台味噌、梅干し、昆布、お茶漬けのもと、インスタント味噌汁、切り干し大根などのほか、研究室用として白松がモナカ、両口屋の二人静、和菓子、七子塗りの敷物、等をトランクに詰め込んだ。

2008 年 6 月 11 日夕、フランクフルト空港に彼らの出迎えを受け、電車に乗り、マンハイムで乗り換えてハイデルベルグ駅に着いた。中央駅とはいえないような小さな駅からタクシーでネッカー川近くの旧市街で路地のような石畳の細い道を入ったところにあるホテルにあつという間についた。Weisser Bock(白い羊)というレストランの上階に客室があるホテルの最上階(5 階)に屋根裏のようだが広々とした我々の部屋が用意されていた。次男が一昨年(2006)の冬、研究室セミナーでの講義(受け入れるかどうかの試験をされたい)のためにハイデルベルグをはじめ訪れたとき、その階下のレストランで現在お世話になっている教授が歓迎会を開いてくれたということである。

その日は早速マイヤー・フェルスターの戯曲「アルト・ハイデルベルグ」の舞台にもなったというネッカー川沿い近くの Zum Roten Ochsen(赤い雄牛亭:赤牛)という居酒屋レストランで夕食を摂った。旅行ガイドブックによれば、この店には嘗て鉄血宰相といわれたビスマルクや「トムソーヤの冒険」や「ハックルベリーフィンの冒険」等で知られる児童文学作家マーク・トウェインなども訪れたことあるということである。その薄暗い店内は壁や天井やテーブルや椅子など、見るものほとんどすべてが古ぼろしく、壁には嘗ての学生たちの生活ぶりを偲ばせる多数の額写真が飾られており、至る所に落書きがあった。木製のテーブルにも一面にナイフで彫り削った落書きがあった。昔のドイツの学生は落書きが得意のようで、この店からそれほど遠くないところにある観光スポットのひとつである嘗ての大学の学生牢にも階段や壁や天井まで、いたるところに大小様々な落書きを見た。「赤牛」も観光名所のひとつとして知られ

ているが、時刻も遅かったためか店内にはピアノ弾き語りの周りに数人がいるだけで客は疎らであった。この店には帰国の前日に、初日に味わったマッシュポテトと今が旬だというアスパラガスをもう一度味わいたくなって訪れたが休みだった。やむなく経営者が同じだという隣の店に入ったが、その店については帰国した今になってみると初日ほどの印象は残っていない。

2. ハイデルベルグにて

ハイデルベルグは、ライン川の支流のひとつのネッカー川流域に展開する人口約 14 万人の大学都市で、ハイデルベルグ大学やマックス・プランク核物理学研究所などがある。ハイデルベルグ大学は 1386 年ルプレヒト一世によって創立されたドイツ最古の大学である。この市邑は第二次世界大戦中も連合軍の攻撃によって破壊されることなく、中世の面影を強く残している。大学博物館には、現在も使われている大学講義講堂があり、その重厚さはレンプラントの絵画を想わせるような豪著で歴史を感じさせるものであった。博物館の多数の展示物の中にはニュートンのプリズム分光計やヘルムホルツの神経筋伝達速度測定装置や人工気胸装置など、珍しくも懐かしい骨董品が陳列されていた。人工気胸装置は嘗て日本でも結核が国民病として恐れられていた頃によく用いられ、筆者が医師としての駆け出しの頃には使われなくなっていたものの、病院の物置で見かけたことがある。ハイデルベルグが連合軍の攻撃対象から外されたのは日本における京都と同じような歴史的な貴重な文化遺産という理由からかもしれないし、聞くところではそこにはドイツ軍地司令部がなかったことということで、戦略的価値が希薄だったためなのかもしれない。戦後はそこにはしばらく連合軍の米軍司令部が置かれていたということだが、現在の米軍基地は郊外にある。旧市街を歩くと、日中は市内に広く点在している大学キャンパス周辺ではもちろんのこと、街中でも学生らしい姿を見かけることは少なかった。彼らは日中勤勉に校内で勉学しているのであろうと想像したものである。

ドイツの高等教育制度は義務教育機関が終わる 12 歳以降は我が国とは全く異なっている。13 歳からの中等教育以降は職業人向けと高等教育向けの学校が厳密に分けられており、進学希望者はギムナジウムという進学校に入学してその卒業試験に合格することで、大学進学に必要な資格(アビトゥア)を獲得しなければならない。進学する大学も試験成績によって決まり、入学した大学でも成績によって希望学部への進学が左右されるというのである。ドイツの大学はほとんどすべて州立で、州によって多少異なるものの学費は基本的に納める必要はない。やり直しができる制度もあると聞くが、我が国の高等教育制度とは大きく異なっている。ハイデルベルグ市内では日中、歩きながら、あるいは自転車に乗りながら携帯電話で話している者や、電車やバスの中で携帯電話を操作している者を見かけたことな

どはほとんどなかった。我が国との違いを思い起こされたのである。一方、滞在期間中は夜になると夜半過ぎまでホテルの周りが喧噪だったことが多かったが、その度合いは当時行われていたヨーロッパカップ・サッカーの試合結果に影響されていたのかもしれない。ドイツ・クロアチア戦でドイツが勝利した夜は明らかに騒がしかった。ハイデルベルグの学生たちはよく学び、かつよく遊ぶという印象を受けた。

ハイデルベルグ最大の観光スポットはネッカー川と市街を見下ろすように小高い丘の中腹に建てられた城砦である。

ハイデルベルグ城は、ドイツを中心として西ヨーロッパの存在した連邦国家である神聖ローマ帝国(962年～1806年)の歴史の一章を彩っている。ケーニヒ・シュツトゥールという山にある城にはケーブルカーで登れたが、城砦の二重環状城砦や堀や塔などは築城が完了した13世紀という歴史を感じさせ、廃墟化している部分はこの城をめぐる数々の戦火を想起させた。城の地下室には約20万リットルの酒樽があり、当地がワインの産地なればこそである。この城は築城後15世紀から16世紀にわたって要塞化されたが、神聖ローマ帝国の威信がゆらぎ始めた宗教改革後の30年戦争(1618年～1648年)とファルツ継承戦争(1688年～1697年)で大きく破壊された。30年戦争では城主はプロテスタント派として戦い、1648年ウエストファリア条約で神聖ローマ帝国の敗北で終結し、戦後には城は破壊前よりもよいものに修復された。しかしながらその後のファルツ継承戦争ではフランス軍によってハイデルベルグ城は徹底的に破壊された。そのためにフランス軍は極めて大量の火薬を使用したという。城の中を案内してくれたアルゼンチン女性ガイドには申し訳なかったが、言葉がなかなか聞き取れず、肝心のことはよく解らなかった。しかし要塞であった城の前方に据えられた砲台のうち、中央の砲台が取り除かれてしまい、その代わりに英国王室から迎えた王妃のための庭園に改造されたのである。その結果城は要塞としての機能は著しく低下し、ついには攻撃によって落城の憂き目を見たというくだりは理解できた。城の修復工事は現在も進行中である。

ハイデルベルグ城内のドイツ薬事博物館では現在の西洋医学における薬事の発展過程を示す展示があった。初期には漢方と同じように薬草や動物の内臓などを乾燥させたものや、珊瑚などの鉱物の粉末などが薬として用いられ、やがてそれらから有効成分を抽出して用いるようになってきたことを示していた。時代とともに変遷する薬局調剤室の様子も興味深く、筆者が現在所有している骨董品の天秤と全く同じものがあった。錬金術研究室もあった。博物館ではバラの花が入っているアンチックのような石鹸を日本への土産として求めた。

城から降りてネッカー川に架かるアルト・ブリュッケ(古い橋:カール・テオドール橋)を渡ってすぐのところに「哲学者の道」への登り口がある。石畳の細い坂道を15分ほど登ったとこ

ろには川と対岸の市街地と山嶺や城などが一望に見渡せる道が通っており、景観を見ながらその道を川下の方へ辿るとやがてなだらかな下り坂になり街に戻った。ゲーテも愛でたという哲学の道からの眺めはすばらしく、昔のハイデルベルグの姿を偲ばせるような趣があった。